

機関番号：17102

研究種目：基盤研究 (B) 海外

研究期間：2007～2009

課題番号：19402027

研究課題名 (和文) 韓国の産業技術革新における日本人エンジニアの役割に関する調査研究
研究課題名 (英文)

Research on the Role of Japanese Engineers in Korean Industrial Innovation

研究代表者

深川 博史 (FUKAGAWA HIROSHI)

九州大学・経済学研究院・教授

研究者番号：30199153

研究成果の概要 (和文)：

近年の韓国企業は、短期間に産業技術革新を成し遂げ、日本や米国の企業を追い上げている。しかし、この産業技術革新の原因や背景については明確ではない。そこで、我々が提示した仮説は、韓国に在住する日本人エンジニア達が、韓国企業の一部の産業技術革新を主導した、というものである。本研究の過程では、これらの日本人エンジニア達にインタビュー調査を行い、この仮説の検証を試みた。

研究成果の概要 (英文)：

South Korean companies in recent years have achieved rapid industrial innovation, catching up to Japanese and U.S. companies. However, the background and causes of industrial innovation is not clear. We presented our hypothesis, the Japanese engineers, which led to some industrial innovation of Korean companies. In the course of the study, we conducted interviews with Japanese engineers, tried to verify this hypothesis.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	2,200,000	660,000	2,860,000
2008年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2009年度	2,000,000	600,000	2,600,000
年度	0	0	0
年度	0	0	0
総計	6,200,000	1,860,000	8,060,000

研究分野：韓国経済論

科研費の分科・細目：経済政策

キーワード：韓国、産業技術革新、日本人エンジニア

1. 研究開始当初の背景

(1) 韓国は近年、産業技術革新のテンポが急であり、さまざまな技術分野で、日本企業を追い上げている。かつて日本企業が優位を占めた分野で、なぜ韓国企業が日本企業に追いつき、日本企業との競争で、逆転を成し遂げたのか、従来の研究では明瞭ではなかった。また、多くの先端分野において、韓国企業が日米の競合メーカーに短期間にキャッチア

ップしたが、それを可能にした産業技術革新の背景については従来、必ずしも明らかにされていなかった。

(2) そこで、本研究では、こういう問題について、韓国企業で働く日本人エンジニアの役割が大きかったのではないかという仮説を立てた。すなわち、産業技術革新の過程における日本人エンジニアの存在に着目し、彼

らの関与無くしては、短期間の技術革新は困難ではなかったか、と考えた。技術開発のスピード要因として、外国人技術者の役割に注目するものであり、日本からの技術導入の多い韓国については、特に日本人エンジニアの役割が大きいと推測された。

2. 研究の目的

(1) 韓国では従来、日本人エンジニアの存在が伝えられてきたが、トータルとしてそれらが把握されているわけではなかった。デジタル家電、液晶技術、携帯電話、等については、韓国の技術開発の現場における日本人エンジニアの存在が伝えられているものの、具体的な役割については必ずしも明らかになっていなかった。本研究では、韓国に在住し、韓国企業に勤務する日本人エンジニアから聞き取り調査を行い、技術開発への関わりについて、従来の経過とその詳細を把握することとした。そして、できるだけ多くの日本人エンジニアへのインタビューを進めることで、各人の個別ヒストリーの積み上げていき、韓国の産業技術革新における日本人エンジニアの役割を総体として明らかにしていくことを目的とした。

(2) 従来の、アジア諸国の産業技術革新は、自国独力の技術開発や、他国からの技術指導を中心に検討されてきた。本研究のように、日本人エンジニアとの関わりで、産業技術革新を研究したものは少ないと考えられた。研究代表者による従来の調査から、すでに日本人エンジニアの存在が確認されており、本研究においては、新たにその役割の詳細を調べて、韓国の産業技術革新の性格を評価することとした。

(3) 韓国の産業技術革新における日本人エンジニアの役割が、従来考えられていたよりも大きいことが判明すれば、過去のキャッチアップに関する見方を変えることになると考えられた。従来のキャッチアップ政策は、特定の韓国企業において、経営組織の革新と人的ネットワークにより積み重ねられた、という見方が主流であった。しかしながら、技術開発における外国人技術者の役割が大きいということになれば、経営ではなく産業技術の伝播のあり方を、見直す必要が出てくると思われた。そのような文脈において、本プロジェクトは、従来の産業技術研究や産業政策研究へ一石を投じる可能性もあると考えた。

3. 研究の方法

(1) 本研究は、韓国の産業技術革新への日

本人エンジニアの役割を明らかにするために、韓国企業を訪問して、日本人エンジニアからヒアリングを実施することを当初の目的とした。そのために、研究準備段階においては、様々なルートを通じて、日本人エンジニアとの接触を試みた。しかしながら、計画開始後しばらくの間は、適当なヒアリング対象が、なかなか見つからず、韓国企業に現役として勤務する日本人エンジニアからのヒアリングは、容易でないことが判明した。研究開始前から、日本人エンジニアの存在は確認されていたが、いざインタビューの承諾を得るとなると、簡単ではなかった。

(2) そのため、研究開始段階においては、ヒアリング対象を当面の間、現役として韓国企業に勤務する方だけではなく、過去に技術移転に関与した日本人エンジニアに拡大することとした。これらの方々からのヒアリング内容は、過去の話が中心となったが、韓国企業との接触に経験豊富な、熟練の技術者からのヒアリングでは、韓国の技術風土などについて、歯に衣を着せない、鋭い意見も聞かれ、大変興味深いインタビュー内容となった。また、結果的には、過去と現在の技術移転の比較、技術革新への関与の状況について有益な意見を聴取することができた。

(3) 韓国企業に勤務する現役の日本人エンジニアについては、技術移転に関与した方々からのヒアリングを継続しながら、様々なルートを通じて探し続けた。その結果、プロジェクト開始後、しばらくして、サムソン中央研究所の常務という、本研究テーマに最適の方に遭遇し、インタビューについても快諾を得た。この方については、1度目は会社の外で面談し、一定の期間を置いて、2度目は会社の中でヒアリングを行った。さらに3度目は、日本に招聘して、この方を囲み研究メンバーでワークショップを開催した。この方からの、ヒアリングの内容は刺激的で、本研究には極めて有益なものであった。

この方の他にもその後、サムスン建設、サムスン電子の方々にコンタクトを取り、双方ともに、ヒアリングの承諾を得た。ソウルを訪問し、長時間にわたってインタビューを実施し、それらの成果は極めて大であった。

4. 研究成果

(1) 研究は、当初の計画以上に進展した。優れたヒアリング対象者と興味深い情報に接して、当初に予想されたよりも、多くの資料を収集できた。当初は、ヒアリング対象を探すことに相当な困難が予想された。ヘッドハンティングされた日本人エンジニアは、面談困難であり、面談できたとしても、なかな

か口を開いてくれないと思われた。実際に、研究当初は十分な成果があがらなかったが、粘り強く、コンタクトを取り続けることで、相手側の日本人エンジニアの信頼を得ることに成功し、最終的に、貴重なヒアリングの成果を得ることができた。

(2) これまでの研究調査のなかで、最大の収穫は、サムスン中央研究所の方を日本に招聘して、この方を囲んだ研究会を実施したことである。「サムスンにおける事業戦略と技術経営」と題して、在韓日本人エンジニアから見た、サムスンの事業経営について、詳細な報告を行って頂いた。研究会は、九州大学のワークショップとして開催し、本プロジェクトの研究分担者を中心に討論を行った。討論は、長時間に及び、本研究プロジェクトにとっての収穫はきわめて大きかった。

(3) とところで、本プロジェクトのヒアリング内容には、秘匿内容が多く含まれていることから、成果内容の公表には、かなりの神経を使っている。ヒアリング内容の公表に際しては、個人名はすべて伏せた上で草稿を作成し、精査後に、公表の準備を進めた。そのため、ヒアリング実施から、内容公表までには、時間差が生じている。過去の事実内容であれば、公表は差し支えない場合が多いが、現時点で進行中の事柄は、公表には、時間を要すると考えている。

(4) 従来のヒアリング資料を、多面的に分析するため、今後の研究推進については、次の方策を想定している。

従来の調査から、日本企業からヘッドハンティングされた技術者たちが、様々な局面で韓国の技術革新に関与したことが明らかとなった。ただ、秘匿事項が多いため短期間の調査ではヒアリング可能な内容に限界がある。さらに時間をかけてヒアリング対象者との信頼関係を維持することで、より多くの情報を入手可能となる。加えて、日本人技術者を雇用した韓国企業側からのヒアリングを行うことで、日本人技術者の役割を、より客観的・多面的に捉えることが可能となる。以上の理由から、本研究は、現在も継続中であり、ヒアリング対象を韓国企業の経営側にまで拡大して、より多面的な資料の収集を展望している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 6 件)

① 深川博史、「21 世紀アジアのお雇い外国人-

在韓日本人エンジニアの経験と技術風土の日韓相違-」、『韓国研究センター年報』、第 10 巻、2010 年、7-16 頁、有り。

② 吉岡英美、「韓国半導体産業の『財閥』の発展とその変容—サムスン電子の事例—」『韓国経済研究』第 8 巻、2009 年、23-35 頁、有り。

③ 加峯隆義、「韓国企業に在籍する日本人技術者の役割」、深川博史編『韓国経済研究』第 8 巻、2009 年、51-59 頁。有り。

④ 吉岡英美、「世界市場の獲得からみた韓国半導体産業の持続的発展—サムスン電子の標準化活動を中心に—」『アジア研究』、第 54 巻 3 号、2008 年、35-51 頁、有り。

⑤ 吉岡英美、「韓国半導体産業の競争力—事業戦略と技術を通じたキャッチアップ後の優位性—」奥田聡・安倍誠編『韓国主要産業の競争力』所収、アジア経済研究所、2008 年、33-70 頁、有り。

⑥ 加峯隆義、「日本人技術者による韓国企業への技術移転」、深川博史編『韓国経済研究』第 7 巻、2008 年、75-85 頁。有り。

[学会発表] (計 3 件)

① 吉岡英美、「韓国半導体産業の『財閥』の発展過程—サムスン電子の事例—」、日本台湾学会第 11 回学術大会、2009 年 6 月 6 日、日本大学。

② S 氏 (サムスン中央研究所常務)、「サムスンにおける事業戦略と技術経営」、在韓日本人エンジニアを招聘し WS 開催、2008 年 11 月 28 日、九州大学経済学研究院。

③ 吉岡英美、「韓国半導体産業の発展と技術者」、「技術者と産業発展」研究会、2009 年 1 月 30 日、アジア経済研究所

[図書] (計 3 件)

吉岡英美、有斐閣、『韓国の工業化と半導体産業—世界市場におけるサムスン電子の発展—』、2010 年、xiv+237 頁。

深川博史編『韓国経済研究』第 8 巻、2009 年、1-77 頁。

深川博史編『韓国経済研究』第 7 巻、2008 年、1-88 頁。

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

深川博史 (FUKAGAWA HIROSHI)

九州大学・大学院経済学研究院・教授

研究者番号：30199153

(2)研究分担者

吉岡 英美 (YOSHIOKA HIDE MI)

熊本大学・法学部・准教授

研究者番号：80404078

清水 一史 (SHIMIZU KAZUSHI)

九州大学・大学院経済学研究院・教授

研究者番号：80271625

久野 国夫 (HISANO KUNIO)

九州大学・大学院経済学研究院・教授

研究者番号：90136416

(3)連携研究者

()

研究者番号：